

偶成  
(横井小楠)

東海の波濤 北越の雪

飽くまで 光景を 見て 百觥を 傾く

十年限り 無し 風塵の 客

故山に 帰臥して 雨声を 聴く

東海波濤北越雪  
十年無限風塵客  
飽看光景傾百觥  
歸臥故山聽雨聲

解説 松平春嶽に大政を奉還すべきことを建議したが、そのために刺客に襲われ危うく脱れた。そのとき、刺客と争いもせず逃げ出したのは士道にもとるとの理由で俸禄を召し上げられ、熊本郊外の沼山荘に引きこもった。偶成とは、たまたまできた詩という意味である。

語釈 ※東海波濤||東北戦争勃発の間近いことをいう。

※北越雪:北越の地に戦端が開かれようとしていることを直接には表さずに言っている。※看光景||天下の形勢を傍観すること。※觥||牛の角でつくったさかずき。ここでは「杯」と同義である。※風塵客||世俗のことに煩わされる人物。官途について動乱の中に生きてきた自分をさす。※帰臥||故郷に帰って休むこと。

※故山||故郷。

通釈 東北や北越では、いまにも戦が始まりそうな雲ゆきである。しかし、私は決して口出しをせずに傍観者となり、酒でも飲んで日々を暮らそう。顧みれば、この動乱の世に十年も飽きずに世事に奔走したものだ。いまは、故郷に帰って俗塵を洗い流し、雨の音でも聴きながら暮らすとしよう。